



困りました

27年前に高校の教員を定年退職しました。世話になった多くの先輩から「群馬県高校教育研究所へ」と誘われました。いやも応もありません。その後「ぐんま教育文化フォーラム」と名称は変わりましたが、ずっと関わり続けています。そろそろ身を引く頃と思っていたら、運営委員は免除するが次は「共同研究者」の席に、と言うのです。私は研究者ではありません。ずい分あちこちで喋ったり書いたりしてきましたが、これは自分の研究成果だと言えるものは何もないからです。

ひろめ屋？

高校時代、学校新聞に夢中になって2年生の時に年11回発行したら上級生に「ひろめ屋」と言われました。明治18年創業の「広目屋」は街頭での宣伝を業とするチンドン屋の先駆けでしたが、現在は株式会社として銀座に「廣目屋ビル」を持つ広告代理店になっているようです。

上級生が「ひろめ屋」と言ったのは、チンドン屋の意味ではなく学校内外のあれこれを新聞で広めていることをからかったのでしょう。

考えてみると、私は高校で社会科の教師としてやってきた仕事を、退職後もその続きで広めていると言えるのかもしれませんが。

「近現代史ゼミ」のこと

フォーラムの活動として20年を超えた近現代史ゼミについては、その都度「部会報告」として『育ちと学び』に載せてもらっていますので省略します。これほど長続きしたのは偏に部会スタッフの協力があったことでした。

フォーラム代表の瀧口典子さん、毎回の司会と見事なまとめの報告を書いている設楽春樹さん、それに受付と部会の会計という厄介な仕事を続けてくれる稲葉民枝さん。この3人と私は玉

広島の被爆建物

内藤 真治

村高校で一緒に働いた仲間でした。ありがたいことです。さらに小学校で数学（算数）の指導に優れた実践を重ねてきた定方佐知子さんがいます。

新たに講師団による交代制という形態になり、近現代史ゼミはもうしばらく続くでしょう。

連載が10年超の「歴史の現場から」

日朝協会という国際友好団体の群馬県支部の機関誌『日本と朝鮮』群馬版（月刊）に「歴史の現場から」という連載を始めてからこの2月で126回になりました。毎月A4判4ページに5,000字を超える文章と自分が写した写真5,6枚を添えるのですが、10年を超えるとネタに苦労します。

この間に47都道府県すべてに出かけ宿泊しましたが、昨今は体力の衰えを痛感しています。今月で満87歳という物理的年齢もありますが、コロナ禍で長らく引きこもっていたためにすっかり筋力が衰えたことは否めません。長い間に撮り貯めた写真と記録、記憶を頼りになんとか書き続けてはきましたが……。

宇品にて

それでも昨年は『育ちと学び』№55（2023・4）の〔私の本棚〕欄に堀川恵子著『暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』を取り上げたこともあり宇品へ行ってきました。本来なら現地を歩いてから本の紹介ができるとよかったです。広島行きはG7サミットの騒ぎが終わった6月にずれこんでしまいました。

広島市の南部・宇品地区を見て回り、日清戦争以来帝国陸軍の外征はすべて宇品港（現・広島港）から出発したこと。そのため武器弾薬、被服、糧秣（兵士の食料と軍馬の飼料）の製造から貯蔵、積み込みにいたるまで巨大な兵站・補給の基地になっていたことが理解できました。

さらに市内には実に多くの被爆建物が残っていることがわかりました。広島へはそれまでに2度

行っていましたが、ここが原子爆弾の落とされた都市であることを実感するのは平和公園の慰霊碑や記念資料館、近くの原爆ドームを見た時くらいで、市内を見て歩いても被爆地であることを忘れさせるような大都市の賑わいでした。

しかし今回訪ねて、市内には多くの「被爆建物」があることを知りました。それらは戦後に大学や高校の校舎として、あるいは運送会社の倉庫として利用されてきましたが、今では多くが取り壊され、現存しても空き家状態になっています。



写真は南区出汐にある旧陸軍被服支廠の建物。兵士の軍服、軍靴のほか帽子、外套、靴下、手袋類から雑貨に至る品々を製造、保管していました。現存するのは1913（大正2）年竣工の4棟で、鉄筋コンクリート造煉瓦貼り3階建て、1棟の長さ94m、高さ17m、延床面積は21,700㎡あります。

爆心地から2.6kmあまり離れているため爆風で鉄扉が歪むなどしましたが倒壊はせず、被爆者が殺到して臨時救護所になりました。



その後使用していた学校の寮や倉庫も順次移転し、1997年以降は利用されぬまま放置されてい

ました。4棟のうち3棟は広島県、1棟のみ国（中国財務局）の管理ですが、いずれすべてを解体、撤去して再開発する予定だったようです。

それが地元をはじめ多方面から戦争遺跡として保存すべきだとの声が高まり、このたび一転して「国重要文化財」に指定されることになったのはまことに喜ばしいことです。現在は建物に「地震の際には危険ですから壁に近づかないでください」との掲示があり、建物内には立入禁止ですが今後は耐震工事を施した上で、内部の公開も可能になるのではないのでしょうか。

地震と言えば、被服本廠は1919年に東京本所区から王子区（現・北区）赤羽に移転しましたが、それまでであった広い跡地に23（大正12）年9月1日に起こった関東大震災の被災者約4万人が避難し、火災旋風のため実に3万8千人もの人が亡くなった現場です（現・墨田区の都立横網町公園）。

広島市内には

広島市郷土資料館（南区宇品1985年開館）は「陸軍糧秣支廠」の一部の缶詰工場を利用してつくられました。外壁の煉瓦を見てもそれとわかりませんが、内部には爆風で曲がった鉄骨がそのままの状態で見られ、保存、公開されている「被爆建物」です。



広島赤十字・原爆病院（中区千田町）は敷地内に「メモリアルパーク」を設け、爆風で歪んだ旧本館の窓枠その他を展示するなど、修学旅行生のための平和教育の資料に役立てています。

被爆体験を語る人が年々減少し、地元で小学生の平和学習教材から『はだしのゲン』が削除されるという時代にあって、戦争遺跡の保存と活用はますます重要になっていくように思います。